

みるかたるつくる

2018 VOL.45
(通巻 107 号)
ART NEWS
千葉県立美術館報



中山忠彦《繡衣立像》2011年

平成30年度企画展

中山忠彦

—永遠の美を求めて—

会 期／ 平成30年11月3日(土・祝) —
平成31年1月20日(日)
会 場／ 千葉県立美術館第1、2、3、8展示室
開館時間／ 午前9時～午後4時30分
休 館 日／ 月曜日(月曜日が祝日の場合は翌火曜日)
年末年始(12月28日～1月4日)
入 場 料／ 一般500円、高校・大学生250円
中学生以下・65歳以上・
障害者手帳持参者と介護者1名は無料

●ワークショップ「じぶんサイズあーと」

日 時／ 11月17日(土) 13:00-15:30
定 員／ 25組 参 加 料／ 一組800円
申 込 み／ 往復はがき(事前申込締切: 11月7日)

●記念対談「中山忠彦の美をめぐって」

日 時／ 11月24日(土) 14:00-15:30
講 師／ 中山忠彦氏、瀧梯三氏(美術評論家)
定 員／ 200名(聴講無料)

中山忠彦は福岡県小倉市(現・北九州市)に生まれます。日展福岡展で伊藤清永の絵を見て衝撃を受け、画家を志しました。昭和28年(1953)に上京し、偶然にも伊藤の知遇を得ました。阿佐ヶ谷洋画研究所でデッサンを学んだのち、伊藤絵画研究所が開設されると、同所に入門して約4年間指導を受けました。

昭和29年(1954)の日展に《窓辺》を出品してわずか19歳で入選すると、翌年の白日会でも船岡賞を受賞します。日展入選から結婚までの約10年間は裸婦像探究の時代でした。制作の基盤となる人体の質感や光の表現を身に付け、大作の裸体群像では、ドラクロワの《サルダナパール》を思わせる迫力を持った全体の量感の表現を試みました。昭和38年(1963)、会津若松近辺を写生する途中のローカル線の中で、後に妻となる若林良江と出会います。2年後の結婚以降、作風は

一変し、妻をモデルとした着衣像を描くようになります。昭和41年(1966)、千葉縣市川市に転居し、以後、同地で制作を続けています。昭和47年(1972)から昭和57年(1982)にかけての4回の欧州旅行で制作の転期が訪れます。アンティーク店等でドレスを購入し始め、ドレスの収集が本格化し、着衣は単なる着衣以上の意味を持ち始めました。豪華なドレスを着た夫人が描かれますが、それは特定の誰かの肖像や事物の再現ではありません。中山忠彦というフィルターを通して絵画を構成する美的要素として変換された、普遍的な美の世界です。

本展では、初期から最新作に至るまで60年以上に及ぶ画業を62点の油彩と13点の版画、デッサンで辿るとともに、画家自身のコレクションであるアンティーク・ドレス6着を展示します。

日本赤十字社所蔵美術展

—いつまでも変わらない人道への想い—

千葉県赤十字奉仕団創設70周年

レポート

日本赤十字社が所蔵する美術コレクションは、赤十字活動の理念である「人道」に共感した作家たちの寄贈によるものです。昭和52年に創立100周年記念事業の一環として本社新社屋を建設した際に、日本赤十字社の呼びかけに対して寄附された作品を中心としています。当時の気鋭の現代美術家から日本の美術界を代表する重鎮までの、さまざまな表現の作品を一堂に見ることのできる貴重なコレクションです。

千葉県立美術館では、平成22年度に「赤十字思想誕生150周年記念 日本赤十字社所蔵美術展～あなたに届けたい、『人道』への想い～」を開催しましたが、今回は、前回の展示では紹介しなかった作品を含め、55点の工芸、洋画、版画、日本画、彫刻の作品及び資料を展示しました。

工芸では、独特の濁手素地に赤絵が鮮やかな13代酒井田柿右衛門の《染錦花鳥文花瓶》など、陶磁、金工、ガラスの各分野において高い評価を受け、日本の近代工芸界の発展に大きく貢献した7作家8点の作品を展示し、伝統的な技術の継承に努めながらも現代にふさわしい表現を追及した作家たちの作品をご覧ください。

油彩画は、コレクションの中核をなすもので、点数はコレクション全体の3分の1を占めます。そのなかから、渡欧して油彩画の技法や表現を研究、独自の表現へと高めて一時代を築いた、梅原龍三郎、荻須高德、小磯良平など洋画界を代表する作家の作品や、赤十字運動の創始者アンリー・デュナンを描いた東郷青児の大作など22作家、24点の作品と、永瀬義郎と南城一夫による幻想的な情景を映した版画作品4点を展示しました。

日本画は、戦後の日本画壇において新しい日本画を創造し、その評価を確かなものとしていた東山魁夷や三輪晁勢、森白甫など9作家9点の作品を紹介しました。

このほか、危険な場所に赴いて命を落とした看護師たちを祀った菊池一雄の彫刻「救護看護婦立像」のミニチュアや、看護師の制服（複製）、昭和期のポスターを展示し、日本赤十字社の歩みを紹介しました。併せて日本赤十字社千葉県支部の歩みと千葉県赤十字奉仕団の活動を理解していただくパネルコーナーを設けました。来場者は千葉県支部のボランティアの方の丁寧な説明により、赤十字活動についてさらに関心を持たれたようでした。

会期／平成30年7月14日(土)～9月24日(月・振休)

会場／千葉県立美術館第1、2、8展示室



関連事業 夏休み親子ギャラリートーク 8月4日(土)、11日(土)

本展では親子を対象とした対話型のギャラリートークを実施。ふきだしの形をしたワークシートを配付して作中の人物や動物がどんなことを考えているか、セリフを作りました。作ったセリフを親子で交換して、どの作品のセリフかを互いにあてっこします。普段とは異なる作品の見方を親子で共有することで、鑑賞を楽しむ時間となりました。



冬のアート・コレクション (1月29日(火)～4月14日(日))

当館では収蔵作品をアート・コレクションの名称で季節ごとにテーマを設けて紹介しています。また、Art Collection+として収蔵作品以外の作品も加えた展覧会も企画しています。

第1・2展示室 具象彫刻展

具象とは、美術では、人物や身近な動物など具体物を題材にした作品に使われる用語であり、彫刻とは、主に立体の美術作品を示す用語です。この展覧会では、日本の近代彫刻の先駆者、小倉惣次郎をはじめ、彫刻界に多大な功績を残した高村光太郎、千葉県を拠点に活動した大須賀力、長谷川昂などの作品により、具象彫刻の魅力を紹介します。

第3展示室 近代洋画の先駆者 浅井忠9

当館では千葉県ゆかりの洋画家、浅井忠の活動を継続的に紹介しています。第9期は、浅井の京都時代に注目します。浅井は京都時代に私設の洋画研究所を設立し、安井曾太郎、梅原龍三郎など多くの優れた画家を育てました。この展覧会では、浅井が京都時代に描いた肖像画、水彩画などの絵画と、各種図案類に加え、浅井の指導を受けた画家たちの作品を紹介します。

第3展示室 北詰コレクション メタルアートの世界Ⅲ

北詰コレクションは、印西市にあった金工作品（金属工芸）専門の美術館「メタルアートミュージアム・光の谷」を運営していた佐倉市在住の北詰栄男氏によるコレクションです。近代工芸界に多大な足跡を残した、佐倉市出身の二人の工芸家、香取秀真、津田信夫の作品を軸に、それぞれにゆかりのある大正から昭和にかけての金工作家の作品群を特徴としています。平成29年度にそのコレクションの大部分が千葉県立美術館に寄贈され、以来、毎回テーマを設けて紹介しています。今回は金属を彫って表現する「彫金」の技法に注目し、北原千鹿、帖佐美行、信田洋など、著名な彫金作家によるメタルアートの魅力を紹介します。

Art Collection+ 第7展示室 具象彫刻の今 彫刻家宮坂慎司と県美の収蔵作家たち

当館は、平成28(2016)年度より、県内在住の若手作家に焦点をあてた展覧会を開催しています。今年度は、具象彫刻作家、宮坂慎司の作品を紹介します。宮坂は筑波大学大学院修了後、主に日展、日彫展に出品し、日展特選などを受賞。現在は筑波大学芸術系の助教を務めています。

第8展示室 コレクション名品展

当館のコレクションのなかから国内外の近現代美術の名品を紹介します。

コローの《ナポリ近郊の思い出》は、ナポリを訪れてから20年経ってから描いた作品です。豊かな階調を見せる木々の様子を捉えており、画面左下の人物の赤い服が程よい色彩のアクセントになっています。理想郷を歩く吟遊詩人のようにも見えます。



コロー
《ナポリ近郊の思い出》



宮坂慎司
《遺標 - 踊 -》

これまでのアート・コレクションより

春のアート・コレクション(4月22日～7月8日)では、1920年代にパリに渡った千葉県ゆかりの二人の洋画家原勝郎と板倉鼎を取り上げた「原勝郎と板倉鼎」展を開催しました。原は独学で18年もの長きに渡って滞在し、板倉はアカデミー・ランソンで学ぶも夭逝したため4年間と短い制作期間でした。それぞれの活動は異なりますが、デッサンやスケッチも併せて展示し、異文化と出合った芸術家の諸相を鑑賞する機会としました。同時開催の「ガラス工芸の魅力」展では、ガラス工芸界の発展に貢献した作家の中から、色ガラスの躍動感あふれる作品の岩田藤七、クリスタルガラスの美しさを追求した各務鑑三、日本の伝統的な美意識を現代によみがえらせた「飾宮」シリーズなどで国際的に高い評価を受けた藤田喬平の活動と作品に焦点を当てました。

夏のアート・コレクション(7月14日～9月24日)では、春のアート・コレクション「浅井忠7ー浅井忠のドローイングー」に続き、「浅井忠8ー浅井忠と周辺作家たちー」を開催しました。グレー訪問時の浅井の作品を時代を追って展示しながら、その時々交流のあった彫刻家、画家、文学者、建築家などの作品や絵葉書を、最近の現地調査による画像と併せて紹介しました。

実技講座

当館の活動の柱、「みる・かたる・つくる」のうち、「つくる」活動の一つとして、毎年県内の作家を講師に招き、実技講座を開催しています。今年度は予定している6講座のうち、現在まで2講座を実施しました。平成31年3月には参加者の作品を紹介する「美術館とつくろう展」を開催します。

【陶芸基礎】 5・6月

茶碗を紐づくり、マグカップを板づくりで制作しました。また、花器などは、あらかじめデザインを考えてきたものをもとに思い思いの作品づくりに取り組みました。釉薬は、個々の作品に合ったものを10種類の中から選択し、作品によっては霧吹きを使うなど、かける方法を工夫して釉薬かけを行いました。鈴木久美子先生の丁寧なご指導のおかげで、満足のいく作品に仕上げることができました。



【陶芸中級】 7・8月

ろくろを使い、水引きで直径20cm～25cmの皿を制作しました。素焼き後、筆で描いたり、和紙やマスキングテープで模様を作ったりして絵付けを行いました。花器などの自由制作では、形にこだわり、大きささまざまな作品にチャレンジしている方もいました。化粧土による線象嵌や、陶芸用下絵の具で着色も行いました。講評会では、鈴木久美子先生から一人一人の作品についてお話をいただきました。



これからの実技講座

【蜜蝋画】 講師：上田靖之先生 / 参加費 各5,000円

- ◇ホリデー・アート 蜜蝋画Ⅰ 10月27日・28日（全2回）
- ◇ホリデー・アート 蜜蝋画Ⅱ 12月1日・2日（全2回）
- ◇ミツバチの巣から取れる蝋を精製して出来る蜜蝋を使い、版画の技法と和紙や新聞紙、墨汁など様々な素材と組み合わせて、独特な抽象世界の作品づくりを体験する講座です。

【金工（鍛金）】 講師：平山記通先生 / 参加費 14,000円

- ◇11月8日～11月29日（全7回）
- ◇銅板を叩いて成形します。初めての方はカップを、経験したことがある方は、ご希望により、好みの器などをつくります。鍛金の基本的な技法や工具の取り扱いを身につけ、金工の楽しさに触れる講座です。

【篆刻 ～オリジナルの雅印をつくろう～】

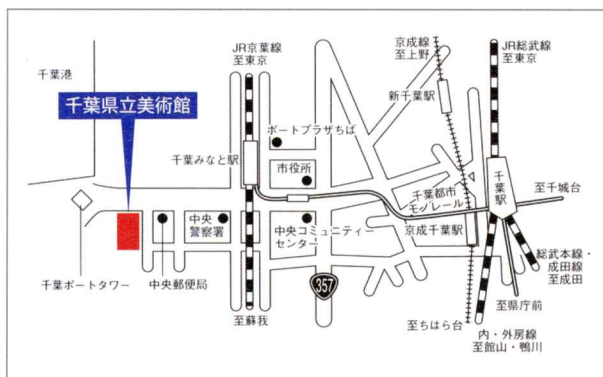
講師：那須大卿先生 / 参加費 9,000円

- ◇1月25日～2月15日（全4回）
- ◇篆刻の歴史を学ぶとともに、姓名等から文字を選び、1文字のものを2つ、2文字のものを2つ計4つの雅印をつくります。朱文・白文の制作方法や用具の取り扱いを学び、篆刻の楽しさに触れる講座です。

※詳しくはホームページをご覧ください。
普及課（043-242-8311）までお問い合わせください。

これまでのワークショップ

展覧会に関連し、ワークショップ「きらめきガラスであーと」を6月16日（土）に開催しました。ガラスの裏面から絵の具で絵や模様を描くガラス絵の技法に加え、絵の具面を尖った竹串で引っ掻いて透かし、新たな絵の具や色紙で彩り、額に仕立てました。作品を発表する参加者は、自信をもって自分の工夫した点を語ることができました。今年度の後半には「中山忠彦展」、「宮坂慎司展」に因んだワークショップを予定しています。



千葉県立美術館 〒260-0024 千葉市中央区中央港 1-10-1
Tel. 043-242-8311 Fax. 043-241-7880

千葉県立美術館「みる かたる つくる」VOL.44（通巻107号）
平成30年10月25日発行